食物アレルギーのミニマムエッセンス

食物アレルギーのミニマムエッセンス作成ワーキンググループ 編

本書は、食物アレルギー診療ガイドライン（日本小児アレルギー学会食物アレルギー委員会作成）を元に作成した研究報告書（裏面奥付参照）の一部を改編したミニマムエッセンスです。

1. 疫学

即時型食物アレルギーの主要原因食物は、鶏卵、牛乳、小麦であるが、学童期以降では甲殻類、果物類などが増加してくる。

年齢別原因食品

年齢群	0歳	1歳	2、3歳	4～6歳	7～19歳	20歳以上	合計
症例数	1270	699	594	454	499	366	3882
第1位	鶏卵 62.1%	鶏卵 44.6%	鶏卵 30.1%	鶏卵 23.3%	甲殻類 16.0%	甲殻類 18.0%	鶏卵 38.3%
第2位	牛乳 20.1%	牛乳 15.9%	牛乳 19.7%	牛乳 18.5%	鶏卵 15.2%	小麦 14.8%	牛乳 15.9%
第3位	小麦 7.1%	小麦 7.0%	小麦 7.7%	甲殻類 9.0%	ソバ 10.8%	果物類 12.8%	小麦 8.0%
第4位		魚卵 6.7%	ピーナッツ 5.2%	果物類 8.8%	小麦 9.6%	魚類 11.2%	甲殻類 6.2%
第5位			甲殻類 果物類 5.1%	ピーナッツ 6.2%	果物類 9.0%	ソバ 7.1%	果物類 6.0%
第6位				ソバ 5.9%	牛乳 8.2%	鶏卵 6.6%	ソバ 4.6%
第7位				小麦 5.3%	魚類 7.4%		魚類 4.4%

各年齢群において5%以上占めるものを記載している。

2. 症状

即時型症状では皮膚症状が最も多く、次いで呼吸器症状が多い。重篤な場合はアナフィラキシーショックを起こす。皮膚症状は、摂取後数分以内に起こることが多い。呼吸器症状を起こす原因食物は、牛乳、小麦、卵の順に多い。消化器症状は、数分から2時間後に生じる。なお、消化器症状の出る患児の95%以上で特異的IgE抗体や皮膚試験が陽性となる。

皮膚	紅斑、蕁麻疹、血管性浮腫、瘙痒、灼熱感、湿疹	消化器	悪心、嘔吐、腹痛、下痢、血便
粘膜	眼症状：結膜充血・浮腫、瘙痒感、流涙、眼瞼浮腫 鼻症状：鼻汁、鼻閉、くしゃみ 口腔症状：口腔・口唇・舌の違和感・腫脹	神経	頭痛、活気の低下、不穏、意識障害
		循環器	血圧低下、頻脈、徐脈、不整脈、四肢冷感、蒼白（末梢循環不全）
呼吸器	咽喉頭違和感・瘙痒感・絞扼感、嗄声、嚥下困難、咳嗽、喘鳴、陥没呼吸、胸部圧迫感、呼吸困難、チアノーゼ	全身性	アナフィラキシーおよびアナフィラキシーショック

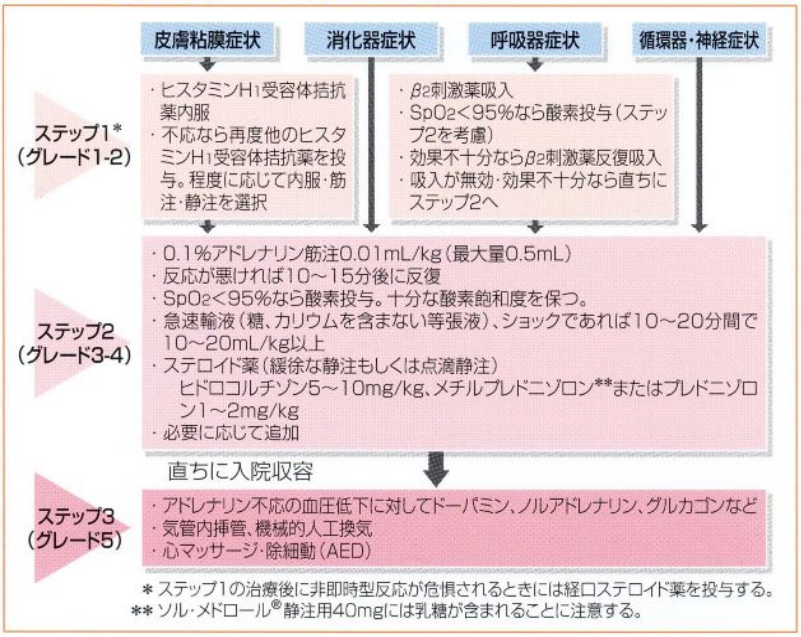
※口腔アレルギー症候群（OAS：oral allergy syndrome）：食物摂取後15分以内に口腔症状、咽頭閉塞感が起こる。シラカバを含む花粉症やラテックスアレルギーに合併するとされる。

4. 即時型反応・アナフィラキシー出現時の治療

特に喉頭浮腫や末梢血管拡張による血圧低下に対しては、アドレナリン筋注と等張液の急速輸液が救命につながる。誤食や粘膜への接触が確認された場合に第一にすべきことは、吐き出して口をすすぎ、皮膚や眼を洗うなど、曝露量を減らすことである。

グレードに応じて各ステップの内容を施行するが、基本的には症状の進展を観察するよりも、積極的な治療を実施する。特にステップ1の初期治療に不応なら、ステップ2への移行に対応できるよう、血管確保とステロイド薬投与を開始し、さらに悪化を認めれば、迷わずアドレナリン筋注を実施する。

即時型反応・アナフィラキシー出現時の治療



5. 保育園・幼稚園・学校での対応（プレホスピタルケア）

患者や保護者は右記の緊急時薬を携帯し、いつでも使えるようにしておく。

概ねグレード2以上の症状では、処方薬を使用の上、医療機関を受診する。過去にショックなど強い症状があった場合は、軽い症状でも早めに対応する。

緊急時のために準備しておく医薬品

1. ヒスタミンH1受容体拮抗薬（抗ヒスタミン薬）内服薬
2. 呼吸器症状に対してβ2刺激薬の内服もしくは吸入（吸入を優先）
3. ステロイド内服薬
4. アナフィラキシーショックや強い呼吸困難などの重篤な誘発既往がある場合はエピペン®

6. エピペン®使用法の指導

2011年9月より食物アレルギーによるアナフィラキシーに対して保険適応となっている。院外でのアナフィラキシーの際に、生命的危険を回避できる可能性がある薬剤はエピペン®をおいて他になく、投与は症状発現から早いほど有効である。講習を受けた登録医が処方できる。

7. 社会的適応

幼稚園・学校には「学校生活管理指導表」、保育所には「保育所におけるアレルギー疾患生活管理指導表」が運用され始めており、保育・教育現場のアレルギー対応推進のために、正確な医療情報の提供が求められる。

平成23年度厚生労働科学研究費補助金　免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業
アレルギー疾患の予後改善を目指した自己管理および生活環境改善に資する治療戦略の確立に関する研究
研究代表者　大田　健（帝京大学医学部呼吸器・アレルギー内科教授※）　※現 国立病院機構東京病院院長（2012年4月より）

食物アレルギー・アナフィラキシー（ショック）のミニマムエッセンス作成ワーキンググループ（順不同・敬称略）
監修：大田　健　長瀬　洋之（帝京大学医学部呼吸器・アレルギー内科准教授）
日本医師会　今村　聡（日本医師会副会長）　鈴木　育夫（鈴木医院院長）
平山　貴度（平山医院院長）　大森　千春（大森メディカルクリニック院長）
萩原　照久（萩原医院院長）

2012年6月発行